

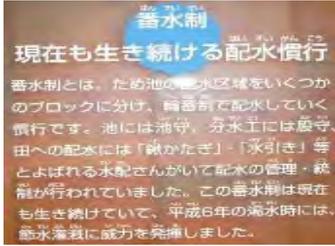
香川県の渇水・利水に関する防災風土資源

整理番号	香渇 1	ひょうげまつりのルーツ（矢延平六）と新池							
災害種別	水害・治水	地震・津波	土砂災害	渇水・利水					
場 所	香川県高松市香川町川東上								
見所・アクセス	高松市香川町には、旧暦の8月3日におどけた姿をつくり、新池までの道を練り歩く「ひょうげまつり」があります。実はこの話は、昔、渇水対策として地域の人々のために新池をつくった矢延平六さんのご恩に報いるためのお祭りです。渇水にまつわる祭りです。新池を見下ろす高塚山には、矢延平六さんを祀った新池神社があります。								
写真・図	 <p>写真1</p>		 <p>写真2</p>		 <p>写真3</p>			 <p>写真4</p>	 <p>写真5</p>
解説文	<p>高松市（旧香川町）の新池(写真1)では、旧暦の8月3日に実った農作物でおどけた姿をつくり、新池までの道を練り歩き、最後はみんなため池に飛び込むという「ひょうげまつり」(写真2)があります。「ひょうげまつり」とはひょうきんなまつりという意味で、昔、地域の人々のために新池をつくった矢延平六のご恩に報いるためのお祭りです。香川県の無形文化財に指定されています。新池を見下ろす高塚山(写真3)の山頂には、矢延平六を祀った新池神社(写真4)があります。写真5は、矢延平六さんを祀った新池神社のある山頂に登る参道です。</p> <p>昔、旧浅野村一带（現在の高松市香川町浅野地区）は稲作りに必要な灌漑用水が少なく、干ばつに悩まされることがたびたびでした。村人たちはため池をつくる計画を立て、藩に願い出ました。その陣頭に立って指図をしたのが矢延平六でした。平六は、村の西を流れる香東川の水を引き入れることを考え、多くの人々が力を合わせ、ついに新池という大きなため池を築きました。村人は喜び、平六は村人たちに心から慕われていました。しかし、世の中はまならず、「新池を造ったのは高松城を水攻めにするためのもの」などという風聞が高まりました。このため、平六は八月三日、裸馬にのせられて阿波国へ追放の身となりました。その後、大きな干ばつに見舞われましたがこの新池の水が大きな効果を発揮しました。間違った風聞に気付いた村人たちは八方手を尽くし、平六を探し求めましたが姿を見付けることはできませんでした。そこで、平六のご恩に報いるため、高塚山に平六を祀り、巡りくる収穫期ごとに祭りをを行い、追慕の念を高めてきたのです。</p> <p>この祭りは現在も浅野地区の人々によって継承され、香川県の人にはお馴染みになっている、このひょうげまつりのルーツ（平六が香東川の流れを引いてくることを考え、かんがい用水を確保した）から地域の渇水特性を学ぶことができます。</p>								
得られる教訓	地域の伝統文化に災害にまつわるものがあることを知ることを教えています。								
教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代	明治・大正	昭和30年代まで	昭和60年代まで	平成以降			

整理番号	香潟 2	千年以上も現役の満濃池							
災害種別	水害・治水	地震・津波	土砂災害	渇水・利水					
場 所	香川県仲多度郡まんのう町神野								
見所・アクセス	<p>香川県まんのう町には、有名な日本で最も古いアースダムと言われる満濃池があります。現在の満濃池は、大宝年間（701～704）に讃岐国守道守朝臣の命により築かれてから、千年以上も機能している周囲約20km、貯水量1540万トンの日本一の灌漑用溜池であります。</p> <p>満濃池は、国道32号から県道200号線を南に約5.5km行った所にあります。</p>								
写真・図	<p>写真 1 写真 2 写真 3 写真 4 写真 5</p> <p>写真 6 写真 7 写真 8 写真 9 写真 10</p>								
解説文	<p>四国には、有名な日本で最も古いアースダムと言われる満濃池（写真 1）があります。</p> <p>香川県まんのう町にある現在の満濃池は、周囲約20km、貯水量1540万トンの日本一の灌漑用溜池であります。この池は大宝年間（701～704）に、讃岐国守道守朝臣の命により金倉川（写真 3）をせき止めて築かれたものが最初とされています。その後、弘仁12年（821）国司や民百姓たちの願いにより、空海が改修工事の監督として迎えられ、空海は、「百姓、恋慕うこと実に父母の如し。」と評されるほどに民百姓たちから慕われ普請を完了したといわれています。その後、元暦1年（1184）に洪水により堤が決壊、約450年間は復旧されないまま荒廃にまかせられ、池の中に人が住み付き、池内村となりました。寛永5～8年（1628～1631）に讃岐領主生駒家四代高俊が家臣の西嶋八兵衛に命じ、再築し現在の原型が出来上がったといわれています。</p> <p>しかし、当時の「閘（ゆる）」は木製（写真 4）であり何度も底樋、堅樋（写真 5）取り換えなければならず、榎井村の庄屋、長谷川喜平次が嘉永2～6年に底樋を木製から石造りにした。当時描かれた絵図（写真 6）で普請の際の様子がわかる。この木樋から石樋に変えた画期的普請は、郷土史料によると、工法に問題があり、普請中に石樋が破損したために、石樋の破損を恐れ地固めを従来より弱く行ったなどから、普請関係者の一部は非常な不安感を持っていたとされています。その普請の翌年、嘉永7年（1854）6月の伊賀上野地震のダメージで一ヶ月たらずの嘉永7年7月、満濃池は、この地震により石造りの底樋が緩み堤が決壊しました。郷土史料には、池守の居宅が流れてしまい死者が出たという記録がありますが、漏水の発見後、早々に周辺の住民に周知警戒した事により、被害を最小限に押さえることが出来たと記されています。まんのう町では、ため池のハザードマップ（写真 7）を示し、住民の皆さんに日ごろから、浸水想定区域（写真 8）や避難経路を確認するなど、迅速な避難行動や災害応急対応を行えるように促しています。</p> <p>現在、満濃池（写真 9）は、毎年6月には、写真 2、10のような「満濃池のゆる抜き」が行われ市民憩いの場となっている千三百年以上も現役の社会資本となっています。</p> <p>今更ながら、満濃池を築き維持管理してきた人たちの苦勞と努力の偉大さを一層深く感じます。</p>								
得られる教訓	私たちの安全・安心が過去からの積み上げの社会資本整備によって確保されていることを改めて認識することができることを教えています。								
教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代	明治・大正	昭和30年代まで	昭和60年代まで	平成以降			

整理番号	香湯 3	どびん水							
災害種別	水害・治水	地震・津波	土砂災害	湯水・利水					
場 所	香川県綾歌郡綾川町滝宮								
見所・アクセス	<p>香川県は昭和 14 年、大かんばつに見舞われました。</p> <p>香川県の藤岡長敏知事は、この時、自ら祭主となって滝宮天満宮で雨乞いの祈願をするとともに、学童に対して「どびん」で日の出前と日没前に稲の根元に水をかけるよう学校に通達を出しました。</p> <p>滝宮天満宮は、国道 32 号沿いのイオン綾川店から西に約 1km 行った所、綾川手前の道路を南に少し入った所にあります。</p>								
写真・図									
	写真 1		写真 2			写真 3			
解説文	<p>香川県綾歌郡綾川町滝宮には、709(和銅 2) 年に建立された滝宮天満宮、有名な菅原道真公ゆかりの雨乞いの念仏まつりがあります。</p> <p>香川県は昭和 14 年、大かんばつに見舞われました。ため池の水が底をつき、稲田は真っ白になり、地面は亀の甲のように割れてきました。</p> <p>7 月 23 日には香川県の藤岡長敏知事が、自ら祭主となって滝宮天満宮で雨乞いの祈願をしました。また、県は 9 月には学童に対して「どびん」で日の出前と日没前に稲の根元に水をかけるよう学校に通達を出したほどでした。この話は、のちに「どびん水」(写真 1)として、香川県の水不足を語る逸話になりました。この逸話は、災害時には大人から子供まで社会全体で対応する必要性を教える無形の防災風土資源と言えるものです。</p> <p>この藤岡長敏知事が祈願した滝宮天満宮の雨乞いの念仏踊り(写真 2)は、国指定重要無形民俗文化財となっています。航空写真の写真 3 に滝宮天満宮の場所を示します。滝宮天満宮は、国道 32 号沿いのイオン綾川店から西に約 1km 行った所、綾川手前の高松西警察署前の道路を左折し南に少し入った所にあります。</p>								
得られる教訓	災害時には大人から子供まで協力して対応することを教えています。								
教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代	明治・大正	昭和 30 年代まで		昭和 60 年代まで	平成以降		

整理番号	香湯 4	萱原用水（かやはらようすい）の碑							
災害種別	水害・治水	地震・津波	土砂災害	渇水・利水					
場 所	香川県綾歌郡綾川町萱原								
見所・アクセス	<p>琴電琴平線滝宮駅より東へ直線距離約 1km の所に大羽茂池があります。その傍の妙延寺北側に萱原用水関連の石碑があります。萱原用水は、綾川町正末で綾川の水を取り入れ、大羽茂池に達する 14km の用水で、綾川町萱原周辺の灌漑用水源です。かつてこの辺りは干害に苦しめられることが多く、特に元禄 10 年(1697) から連続して干害に見舞われ、元禄 14 年(1701) には 270 人が餓死しそうになったと云われています。この石碑は、イオン綾川店から南に県道 185 号を約 500m 行った所にあります。</p>								
写真・図	 <p>写真 1</p>	 <p>写真 2</p>	 <p>写真 3</p>	 <p>写真 4</p>	 <p>写真 5</p>				
解説文	<p>琴電琴平線滝宮駅より東へ直線距離約 1km の所に大羽茂池（写真 1、4）があります。その傍の妙延寺北側にのように、3つの石碑があります。左は県営滝宮東部排水対策特別事業、竣工記念碑、昭和 58 年 3 月建立。中央に萱原導水路改修記念碑、昭和 52 年 1 月建立、その右に大正 9 年(1919) に建立された太郎右衛門の大きな彰徳碑（写真 2）があります。</p> <p>萱原用水は、綾川町正末で綾川（写真 3、5）の水を取り入れ、大羽茂池に達する 14km の用水で、綾川町萱原周辺の灌漑用水源です。かつてこの辺りは干害に苦しめられることが多く、特に元禄 10 年(1697) から連続して干害に見舞われ、元禄 14 年(1701) には 270 人が餓死しそうになったそうです。この窮状を救うために奮闘したのが、萱原村の庄屋であった久保太郎右衛門です。大正 9 年(1919) に建立された太郎右衛門の彰徳碑は、今日も地域の人々に大切にされています。</p> <p>四国防災八十八話第 76 話で、この久保太郎右衛門の話が次のように紹介されています。</p> <p>「萱原周辺は水利の便が悪く、用水確保に苦労していました。このため、ため池が多く築かれ、水田が開かれていましたが、日照りがあると稲は立ち枯れになることもありました。久保太郎右衛門は、延宝 4 年(1676) 萱原村（かやはらむら）（現在の綾川町萱原付近）に生まれ、20 歳で庄屋になった人です。太郎右衛門は、農民の苦しみを何とかして救済しようとして、綾川の水を水路に入れ、多くの溜池に注ぐことを考えました。自ら測量をし、山田村（現在の綾川町山田付近）の正末から大羽茂池に達する用水路の計画を立てました。この計画を高松藩に願ひ出しましたが、許可はすぐには出ませんでした。重ねて願ひをしていると、太郎右衛門が 28 歳の元禄 16 年（1703）、一部について許可が出て、数ヶ月で工事を完成しました。しかし、水は池に届かなかったのので、藩主に直訴してもとの計画を認めるよう嘆願しました。</p> <p>そこで太郎右衛門は捕らわれ、投獄されました。太郎右衛門の妻は金比羅さんにお参りし、太郎右衛門を父母のように慕っていた村人も釈放を懇願しました。釈放後、太郎右衛門は藩主に用水路計画の事情を一課ながらに訴え、その志に藩老は感激して、宝永 4 年（1707）、太郎右衛門に許可が下りました。</p>								
得られる教訓	ねばり強く奮闘した先人の苦勞を知ること教えています。								
教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代	明治・大正	昭和 30 年代まで	昭和 60 年代まで	平成以降			

整理番号	香濁5		番水と香箱（こうばこ）						
災害種別	水害・治水	地震・津波	土砂災害	濁水・利水					
場所	香川県三豊市財田町財田中								
見所・アクセス	<p>四国の中でも特に雨の少ない香川県では、昔の水争いから生まれた「番水」などの知恵がありました。番水とは濁水被害を減らすため水田への配水の仕組みで、一定の順序と時間に従って田に水を入れる方法を決めた制度であり、その時間は、香箱というもので香や線香を燃やした幅や長さによって計られ、持ち時間が来ると太鼓で合図をし、次の順番の人の田に水を入れるといったことをしていました。香川用水記念公園の水の資料館には、番水制度をわかりやすく説明した展示があります。</p>								
写真・図	 <p>写真1</p>		 <p>写真2</p>		 <p>写真3</p>				
解説文	<p>瀬戸内海側の寡雨地域の香川県では、濁水に備え、満濃池に代表されるような「ため池」が多く造られ、香川用水ができ吉野川から水が供給されている現在もたくさん残っています。しかし、このようなハード対策がなされる以前の香川には、番水や証文水など水争いから生まれた濁水被害をできるだけ小さくしようとする節水術があります。</p> <p>四国の中でも特に雨の少ない香川県では、池の水が少なくなると、たいていの土地では、「番水」(写真1)というものが行われていました。番水とは濁水被害を減らすため水田への配水の仕組みで、一定の順序と時間に従って田に水を入れることであり、その時間は、香箱というもので香や線香を燃やした幅や長さによって計られ、香箱に敷いた沫香の燃焼幅で行われ、持ち時間が来ると太鼓で合図をし、次の順番の人の田に水を入れるといったことをしていました。水の大切さは今も昔も変わらない。濁水という災害から農作物の被害を少なくしようとする知恵として番水制度(写真2)があります。</p> <p>現在もこの番水制の配水慣行は生き続けていて平成6年の濁水時には、節水灌漑に威力を発揮しました。昔の番水制を今に伝える香箱（こうばこ）(写真3)は、防災風土資源といえるものです。</p>								
得られる教訓	貴重で少ない水を分け合う先人の知恵に学ぶことを教えています。								
教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代		明治・大正	昭和30年代まで		昭和60年代まで		平成以降

整理番号	香濁 6		大小二つのため池						
災害種別	水害・治水	地震・津波	土砂災害	渇水・利水					
場 所	香川県さぬき市鴨部								
見所・アクセス	<p>香川県さぬき市志度町には、白川原池、能徳池という大小二つのため池があります。300年以上も前に、庄屋が村人のためを思い、腹切り問答の末、藩から築堤の許可を得て完成させた池です。この二つのため池は今も立派に機能しています。</p> <p>白川原池は、国道 11 号を津田方面に向い左折し県道 137 号線を北に 1.3km 行った所にあります。</p>								
写真・図	<div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="text-align: center;">  <p>写真 1</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>写真 2</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>写真 3</p> </div> </div>								
解説文	<p>香川県さぬき市志度町に白川原池（写真 1）というため池があります。300 年以上も前に、庄屋が村人のためを思い、腹切り問答の末、藩から築堤の許可を得て完成させた池です。この庄屋に感謝して、干ばつ時にも庄屋家の田だけは水を絶えさせまいと、村人たちが築いた小さなため池、能徳池（写真 2）があります。この二つのため池は今も立派に機能し、ため池をめぐる人々の思いやりの心を伝えていきます。</p> <p>四国防災八十八話の 85 話には、次のように紹介されています。村の庄屋矢田助右衛門は、深谷川という谷に土手を築いて水を溜め、下流の未開拓地に五〇町歩の水田をつくる計画を立てました。これを時の高松藩主に許可を歎願したところ、普請奉行が下検分の結果、築堤付近の岩盤はその肌が傾斜しているから貯水が無理であるという理由で許可になりませんでした。検分使が帰った後で、諦めかねて助右衛門は、意を決して裸馬に跨り役人の後を追いました。やっと屋島付近で追いついて重ねて心情を訴え許可を歎願しました。その時いわゆる腹切り問答がなされました。それは、「もし水を溜めることができなければ、腹かき切って詫げる」というものでした。この自信と決意が通じて工事はついに許可されました。というものでした。この自信と決意が助右衛門は悲壮な覚悟で工事に着手しました。工事は至難な大工事でしたが、命をかけた助右衛門の至誠が工事に携わる人に通じないはずはなく、監督する者もされる者も、ただ成功の一点を目指して働き抜きました。こうしてついに完成したのが今日の白川原大池です。</p> <p>助右衛門の死後、この偉大な業績を讃え、末代の受益を感謝して、村人たちは助右衛門の屋敷裏に再び池を築きました。干ばつの年、白川原池が「おはらい」する前にまずこの池に導水して、矢田家所有の田だけは干ばつから守ってあげようというのです。名付けて能徳池と言います。ひがた人々の感謝の気持ちは、「白川原大池干濁になると、能徳池には水絶つまいぞ」と、地域に伝わる歌に示されています。</p> <p>現在の航空写真(写真 3)に、二つのため池の一つ白川原池の場所を示します。</p>								
得られる教訓	ため池をめぐる人々の思いやりの心を忘れぬことを教えています。								
教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代	明治・大正	昭和 30 年代まで	昭和 60 年代まで	平成以降			

整理番号	香渴7	平成6年異常渇水と四国の水がめ							
災害種別	水害・治水	地震・津波	土砂災害	渇水・利水					
場所	香川県綾歌郡綾川町と高知県土佐郡土佐町田井								
見所・アクセス	平成6年(1994)は香川県は異常な渇水の年でした。香川県綾南町(現在の綾川町)では、歴史的な大渇水乗り越えることができたのは町民の節水の努力の他に、香川用水が早明浦ダムの命の水を送り続けてくれたことです。四国防災八十八話の中で平成6年大渇水を体験した綾川町の住民の方が語られています。								
写真・図				写真1	写真2	写真3			
解説文	<p>平成6年(1994)は香川県は異常な渇水の年でした。香川県綾南町(現在の綾川町)では、水不足の危機的な状況の中で、無形文化財としてではなく、真剣に雨の到来を祈念して滝宮天満宮で念仏踊りの奉納が行われるほどでした。また、町民は、町の呼びかけに応じて連帯して懸命に節水に努力しました。大渇水をしのぐことができた要因のひとつとして、綾南町では、こうした町民の努力の他に、先人が築いたダムと用水路による「命の水があったことを伝えていきます。その命の水が四国の水がめと言われている早明浦ダム(写真1)のことで。</p> <p>四国防災八十八話では、この時のことを「7月2日の梅雨明け以降、綾南町(現在の綾川町)の町民は、猛烈な暑さと異常な渇水のため焦燥感を感じていました。7月24日に早明浦ダムの貯水率はゼロとなり、別枠の発電用の用水に頼ることになりました。二日後に台風7号の接近により慈雨がもたらされ、貯水率は31パーセントにまで回復しましたが、その後再び貯水率は低下し、危機的な状況となりました。この危機を救ったのが8月16日の台風14号と9月30日の台風26号でした。この歴史的な大渇水乗り越えることができた要因の一つは、香川用水が命の水を送り続けてくれたことです。渇水に心をいためた期間、住民は、毎日テレビに映し出される早明浦ダムの風景を食い入るように見つめていました。あのダムに残された水だけが、香川県の、そして綾南町の住民の命を支えてくれていたからです。台風によって早明浦ダムに勢よく流れ込む水を見て歓声を上げるような気持ちとともに、今更ながら、先人の果たした偉業に驚嘆する思いでした。「四国は一つ」の言葉を実感したものでした。」と紹介しています。</p> <p>この年以降、香川県の中学一年生は、遠足に香川用水関連施設を見学することが恒例となり、早明浦ダム周辺に中学生の手で植樹を写真2のように実施するような風景も見られるようになりました。また、平成17年の渇水時には9月1日には貯水率0%になり大きな渇水被害が予想されましたが、9月7日の台風7号の雨を一気に貯め貯水率100%(写真3)にして危機を救いました。その台風では2億8千万トン貯留し、水道料金(110円/m³)に換算すると約300億円の水を貯金したことになり、早明浦ダムは四国の水の貯金箱との声があがるほどでした。</p>								
得られる教訓	日頃から命の水を供給する水源地域のことを思うことを教えています。								
教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代	明治・大正	昭和30年代まで	昭和60年代まで	平成以降			

整理番号	香湯 8	干ばつ「大野原は月夜に焼ける」を解消した豊稔池堰堤							
災害種別	水害・治水	地震・津波	土砂災害	渇水・利水					
場所	香川県観音寺市大野原町五郷田野々1050 番地								
見所・アクセス	香川県観音寺市大野原町には、景観的にも学術的にも他に類を見ない貴重なマルチプルアーチ構造を採用した豊稔池堰堤（ほうねんいけえんてい）（写真1）があります。中世ヨーロッパの古城を偲ばせる偉容と風格を漂わせる豊稔池堰堤は、阿讃山脈を分け入る杵田川（くにたがわ）上流にはあります。1930年（昭和5年）に造られた豊稔池は80年近く経過した今でも約500haの農地の水がめとして活躍しています。豊稔池は、高松自動車道・大野原ICより国道11号、県道8号観音寺佐野線、9号大野原川之江線を通り約25分国道32号から県道200号線を南に約5.5km行った所にあります。								
写真・図	<p>写真1 豊稔池ダム(ほうねんいけダム) 写真2 豊年池堰堤の建設中の写真 写真3 豊年池の概要を説明した現地看板 写真4 豊年池ダムの標準断面図 写真5 中世ヨーロッパの古城を偲ばせる偉容と風格を漂わせる豊稔池堰堤</p> <p>写真6 重要文化財 豊年池堰堤 写真7 杵田川(くにたがわ)上流の豊年池ダム 写真8 水を湛えた水面と周囲の山並みとの調和した豊稔池堰堤 写真9 今でも約500haの農地の水がめとして活躍している豊稔池堰堤 写真10 豊稔池の放流風景は季節の風物詩</p>								
解説文	<p>豊稔池ダムは、香川県観音寺市大野原町にある現存する日本最古の石積式マルチプルアーチダムとして、国の重要文化財（建造物）に指定されていますが、その昔、“大野原は月夜に焼ける”と言われ、江戸時代以前は土地が高燥で一面の原野でした。大正時代の二度の大干ばつを契機に近代式ため池の必要性が高まり、豊稔池築造計画が立ち上がりました。工学博士の佐野藤次郎氏の指導のもと大正15年に着工し、県の直営工事として実施され、地元の受益農家を中心に構成された作業班により、写真2のように建設が進み、わずか3年8ヶ月の間に堤長128m、堤高30.4mの石積みダム(写真3)が完成しました。</p> <p>当時、ダム建築の最新技術であるマルチプルアーチ構造(写真4)を採用し、中世ヨーロッパの古城を偲ばせる偉容と風格を漂わせる豊稔池(写真5)は、景観的にも学術的にも他に類を見ない貴重なダムとして現在でも高く評価され、平成18年(2006年)に国の重要文化財として登録(写真6)されました(指定名称は「豊稔池堰堤」)。</p> <p>写真7のように阿讃山脈を分け入る杵田川(くにたがわ)上流に「豊稔池堰堤」はあります。長い年月の風雨にさらされた堰堤(写真8)は、水を湛えた水面と周囲の山並みとの調和で四季折々に見事な景観を見せてくれています。堤長145.5m、堤高30.4mのコンクリート造溜池堰堤で、両端部を重力式、中央部が5個のアーチと6個の扶壁(バットレス)からなるマルチプルアーチ式で、その構造形式は農業土木史上価値が高く、また、昭和前期における堰堤建設の技術的達成度を示しており、80年近く経過した今でも約500haの農地の水がめとして活躍しています(写真9)。多連式アーチダムとしては、宮城県仙台市の大倉ダム(二連式)を含め、全国に二つしかなく、当時米国で最新技術であったマルチプルアーチが適用されるなど、ダム技術史を語る上においても貴重な建造物であります。一年を通じて多くの観光客がここを訪れており、特に夏(不定期)に行われるユルヌキ(放流)風景(写真10)は季節の風物詩として知られています。80年以上も現役の社会資本となっています。</p> <p>今更ながら、豊稔池を築き維持管理してきた人たちの苦勞と努力の偉大さを一層深く感じます。</p>								
得られる教訓	私たちの水利用の安全・安心が過去から積み上げられた社会資本整備によって確保されていることを改めて教えてくれています。								
教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代	明治・大正	昭和30年代以前	昭和60年代以前	平成以降			

整理番号	香濁 9	高松城下町の水道遺構、今も残る大井戸							
災害種別	水害・治水	地震・津波	土砂災害	湯水・利水					
場所	香川県高松市瓦町2丁目10-3								
見所・アクセス	高松市の菊池寛通りからアーケードの南新町商店街に入り、約50m北に進むとカレーライス店のCOCO壺番屋が立っています。その横の路地を右折して東に約50m進んだ右側に、水道遺構として今も残る大井戸(写真1)があります。								
写真・図									
解説文	高松城下町の水道遺構として今も残る大井戸(写真1)は、過去に高松藩主松平頼重が整備した給水地・井戸のうちの一つです。これらの給水源のなかでは、旧香東川の川筋の亀井戸・大井戸・今井戸などが特に有名ですが、現在の上水道が普及するにつれて順次廃れ、水源地となっていた井戸も大井戸のみとなった、とされています。藩政時代の高松の主な水道水源(井戸)の位置を、標高マップ高松市北部(国土地理院の5mメッシュ・DEMより作成)に重ね合わせた図(写真2)に示します。図のように高松城は香東川扇状地扇端部の微高地にあり、藩政期の主な水道水源の井戸は、城内にある①披雲閣井戸から②血屋敷井戸跡、③今井戸跡、④亀井戸跡、⑤大井戸と扇状地にあることが分かります。								
	①披雲閣井戸(写真3)	高松松平家の別邸及び迎賓館的な存在として建築された高松城内にあります。							
	②血屋敷井戸跡(写真4)	東西約4m南北約6mの近世武家屋敷の大型井戸。平成17年高松城跡で発見され、現在、丸亀商店街の北詰め、高松三越の北にある立体駐車場に復元され、復元場所への入口は三越前のバス停の脇にあります。							
	③今井戸跡(写真5)	今井戸跡がある藤森神社は、良質の清水が湧き出て、藤蔓(ふじかずら)が繁茂していたことから名付けられたとされ、高松市美術館西側の道路を、美術館通りから約50m北に行ったところにあります。							
	④亀井戸跡(写真6)	亀井戸水神社にある看板には「高松藩初代藩主松平頼重は正保元年(一六四四)水源七か所を選び土管・木樋・竹管を埋めて水道を通った。この亀井戸は、わき水の出る穴が甕形の穴なので甕井(亀井)霊泉と呼び、その大きさはほぼ東西十八メートル・南北三十六メートルあり、土地の人々は井戸と呼び、主として高松市の東北部に給水していた」と記載されています。							
	⑤大井戸(写真7)	菊池寛通り1本北の細道沿いにあり、大井戸の石碑と大井戸の現地説明看板の史跡があります。							
<p>写真8の「高松城下のおもな上水道の水源の図」は、上記の水道水源を、亀井戸跡-高松城下における上水施設調査-埋蔵文化財発掘調査報告書(2012年3月)に重ね合わせたものです。</p> <p>西島八兵衛が行った旧香東川の付け替えは、高松城下の洪水氾濫を防止した一方で、城下の飲料水の質を低下させ、町の箇所にも井戸を掘る切っ掛けになったとされています。このように高松城下町の井戸水源は、高松にどのように上水道が作られたかを知る貴重な文化財で、特に城下町の町人住居域に水を供給していた亀井戸は、後世に伝える導水施設として、四番丁スクエア(写真9)に復元され紹介されています。最後に、現在の航空写真(写真10)に、藩政時代のおもな上水道の水源(井戸)のあった位置を示します。</p>									
得られる教訓	私たちが暮らしている高松は、かつて香東川の締め切りより洪水氾濫から解放された一方、城下の飲料水の質低下に悩まされました。江戸時代の井戸や導水施設などの上水道・水源整備の歴史は、今日の高松発展が、過去からの社会資本整備によって成り立っていることを教えてくれています。								
教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代		明治・大正	昭和30年代まで		昭和60年代まで		平成以降